

授業評価票の作成に際して

社会の変化と国民意識の変容という歴史的変動の潮流の中で、既存の枠組みの再構築が急速に進むと考えられている。このような状況下において、学校教育の果たすべき役割として、[生きる力]の育成とともにその知的側面である[確かな学力]の育成が求められている。

平成 15 年 10 月に出された中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」によれば、[確かな学力]とは「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたもの」と定義づけられている。

この[確かな学力]を、授業を通していかに身に付けさせるか、それが教師の本分であることは言うまでもない。教師は、創造的な理論や方法によって、目の前にいる生徒一人一人に、十分に力を発揮させ、新しい高い次元へと変革させなければならないのである。そのために、授業がどのように行なわれ、生徒がどのように変容しているか、またどのような点でつまづいているか、それを改善するためにどのように指導していけばよいかを客観的に明らかにする必要がある。言わば、授業評価である。授業評価を活用することで「魅力ある教室」は創られるのである。また、授業評価は別の側面を持っている。すなわち、生徒にとって授業評価は、自らの学習状況に気付き、自分を見つめなおす契機となり、その後の学習や発達を促すという意義があるのである。

生徒が個性や能力に応じて、自ら学び、自ら知識や技能などを習得し、自ら創造的な活動を行なうのを手助けすることが教師の役割であることを考えるとき、授業評価は大きな意味を持つ。

このような観点から、平成 18 年度の 10 年経験者研修教科指導等研修及び採用 5 年次教員研修教科研修の一環に授業評価票を作成した。

10 年経験者研修教科指導等研修を通して作成された授業評価票は、授業者への評価と生徒自身の自己評価から構成されている。授業者への評価では、現在、多くの高等学校で活用されている項目に加え、教師自身の授業観や教材観を反映する項目や、授業場面の生徒指導を明らかにする項目を設定した。他方、生徒自身の自己評価では、いわゆる評価の四観点に立脚した項目を設けているが、とりわけ授業観察法では見えにくい観点、すなわち関心・意欲・態度の観点についての項目は授業者の参考になると考えられる。「しっかり学習したといえる場面」を振り返らせたり、「学習したことを誰かに伝えてみたい」かを問うことで、教材に対する生徒の関心・意欲や態度を測ることができる。また、「なぜ？」と感ずることが興味・関心の出発点であり、事象に対する思考深化にもつながる。さらに、「そうか」と納得することは、事象や事象間の論理性や関係性を確認することであり、知的好奇心の発揚をもたらす。そして、「一番自分の気持ちに近いものは？」との問いは、授業への関心・意欲・態度を映すものである。

ついで、5 年次教員研修教科研修を通して作成された授業評価票は、本時の授業を振り返らせることに加え、日常の授業の在り方を問うている。評価票は、記述による回答を多く求めているが、具体的な記述内容から精査することをねらったことである。また、「興味・関心グラフ」は授業者のみならず生徒にとっても有益であると考えられる。

これらの事例が、各学校の授業改善につながれば嬉しい限りである。